

海外インターンシッププログラム

派遣国・都市名	オーストラリア 西オーストラリア州 パース
研修先	西オーストラリア州・兵庫文化交流センター
プログラム実習期間	2019年8月6日～2019年8月17日
学部/研究科・学年	国際人間科学部3年

インターンシップ就業実習 報告書

2019年度は、兵庫県立文化センターで主に五つのことをさせて頂きました。①子どもたち向けの日本文化紹介プレゼンテーションの作成、②センターの会員の方（大人）向けの日本文化紹介プレゼンテーションの作成、③日本語教室への参加、④チャッターボックスへの参加、⑤センターが所持している本の貸し出し・返却・整理作業です。以下、順を追って説明させて頂きます。

①子どもたち向けのプレゼンテーションは、私たちが学校に出向いて教室を一つ頂き、そこに順に幼稚園から中学生までの生徒がやってくるという形で行い、約30分の同じプレゼンテーションを計8回行いました。今までは同世代向けのプレゼンテーションしか行ったことが無かったため、子ども向けに、しかも英語でプレゼンを行うとなると、困難が多くありました。最も大切なのが、インタラクティブなプレゼンテーションを作るということです。日本スタイルのプレゼンは、基本的に講義型なので、自身の想像以上に相手を巻き込む工夫をしても足りないぐらいでした。他にも、アクティビティーを含めるなどして、プレゼンの内容自体を魅力的なものにすることが大切でした。今回私たちは、夏のイベント(甲子園と夏祭り)のことを紹介しましたが、写真や動画を多く取り入れ、盆踊りなどの実践を取り入れられたことで、子どもたちにも楽しんでもらえたので、その点は評価できると思います。ただし、子どもが相手だと計画していたようにはいかないこともあったので、あらゆる状況を想定し、できる限りの準備を行うべきでした。また、私にとっては子供たちの英語を聞き取るのが難しく、言語レベルをさらに上げていかなければならないと改めて実感させられました。

②センターの会員向けの日本文化紹介プレゼンは、最終日に約1時間行いました。私は日本の音楽をテーマにプレゼンを作成したのですが、そもそもオーストラリアの方がどのような話題に興味を持っているのかが分からず、さらに会員の中には日本のことをよくご存じの方も多いため、どのようなトピックを盛り込むかという点はとても悩ましかったです。当初は実際に様々なジャンルの音楽を聞いてもらいながら、その文化的背景を紹介することで、音楽にさほど興味の無い方にも楽しんでもらおうと考えました。しかし、やはり自分自身に造詣が無く、退屈なプレゼンになっているというご指摘を頂き、アクティビティーのダンスをメインに音楽を紹介するという形を取りました。当日は盛況のうちに終われましたが、改善点はまだまだあったように感じます。子ども向けのプレゼンでもそうでしたが、相手の立場をここまで強く意識しながらプレゼンを作成したことは無かったので、その視点を獲得できたことは大きな学びでした。

③日本語教室では、日本語の先生方が授業を行っているところを見学したり、問題を解く補助をしたりということを行いました。普段意識せずに使っている日本語が、どのような体系で成り立っているのかを考え、またそれを言語化していくというプロセスは、日本語を客観的に見る機会になり、非常に学びの多いものでした。皆さまレベルは様々でしたが、とても熱心に日本語を勉強されている方ばかりで嬉しく思うのと同時に、自身の勉強への意欲も刺激されました。

④チャッターボックスは、オーストラリアの方やパースに滞在している日本人が繋がり、コミュニティを作る場として英語や日本語で会話が行われます。日本人も含めて、本当に様々なバックグラウンドを持つ人々がいらっしやり、そこで色々なお話が伺えたことは貴重な体験でした。私の場合は、日本文化の話をするというよりも、もう少しジェネラルに私自身の大学での専門分野の話や、日本やオーストラリアの社会について話すことがほとんどでした。トピックが難しかったこともあり、思ったように物事を伝えられないもどかしさや、英語を理解する難しさを感じ、やはり英語力が重要だと感じたのと同時に、言語だけでなく、自身の専門分野や知識をより深めていかなければ、世界には通用しないのだということを実感しました。今後は、より知識を深めながら、「なぜ自分や日本がそうするのか」という原体験的な部分まで客観的に考察できればと思います。

⑤センターの本の貸し出し・返却・整理作業は事務的なものでしたが、オーストラリアの方々がどのような日本文化に興味を持っているのかということを知る上で有益でした。これを機会に話の種を広げることができ、また自身が日本文化を改めて学ぶ契機にもなりました。

全体として、やはり日本ではできないような経験をさせて頂き、多くのことを学べました。反省点としては、もう一人の派遣生が英語に堪能な方だったこともあり、なかなか私自身が前に出られなかったということです。実際にネイティブスピーカーを前にすると、ひるんでしまったり、自信が無くなったりすることもありましたが、又と無い機会なので、今後行かれる方には是非負けずに挑戦して頂きたいと思います。私自身、今回は悔しい思いも多く経験したので、今後はもっと挑戦していけるように英語力に磨きをかけていこうと思います。そして、私のもう一つの課題は表現力でした。話す際にどうしても日本的なフラットな話し方になってしまい、楽しさが伝わらないと何度もご指摘頂きました。物事には色々なやり方があって、その場に合わせて自分が変わっていかなければならないのだということを実感した瞬間でした。大変なことも多くありましたが、良い経験をさせて頂きました。

感想および意見

私がこのインターンシップを通して感じたことは、大きく四つありました。①オーストラリアにおける日本のプレゼンスの高さ、②英語力の重要性、③相手起点で物事を考える重要性、④多文化の中で生きるということです。以下、順を追って説明させていただきます。

①オーストラリアにおける日本のプレゼンスの高さについて、オーストラリアの学校では、外国語の授業で日本語を選択する学生が一番多く、パースにおいても二番目の人気を誇るそうです。センターの会員の方は勿論のこと、センター外でも、日本人だと言うと喜んで日本食や着物の話題を振ってくれる方が多くいらっしゃいました。これは、日本がオーストラリアの輸出相手国第1位である期間が1970年ごろから約40年間続いたことによるものだそうなので、その座が中国に取って代わられた今、この友好的な関係性をどう持続させるのかという点の一つ大きな課題だと思います。その意味で、西豪州兵庫文化交流センターが行っている文化的でソフトな交流というものは、今後より重要視されるべきなのではないかと感じました。

②英語力の重要性について、センターでの意思疎通は英語と日本語で行われており、英語が理解できず途方に暮れるということは起こりませんでした。私は海外勤務を経験してみるということをインターンシップ志望理由の一つに挙げていたため、この点については日々意識していました。当たり前ですが、指示が上手く理解できていなければ何事も二度手間になり兼ねず、円滑に業務を進められません。また、私はホステルに滞在していましたが、世界中から人々が集まって話す際に使われる言語はやはり英語で、そこでの経験を通じて、自身、そして一般的な日本人は他国の方々と比べて、会話力としての英語力が低いということを実感しました。日本人は英語が苦手という認識は、オーストラリアでもあるようでしたが、私は必ずしも英語ができないことが悪いとは思いません。世界共通語の英語ができなくとも、経済大国としての地位を維持してきたことは、称賛に値するかもしれないとも思います。しかし、インターンシップを通じて、海外からの視点を自身の考えやビジネス、国の政策に取り入れることの大切さを強く実感できたからこそ、海外との架け橋になる英語力を鍛える必要性を感じました。

③相手起点で物事を考える重要性については、プレゼンで思い知らされました。大学生になるまでほとんどプレゼンの経験が無く、授業ではある程度専門的な内容を、専門知識のある方に向けて発信するのが通常なので、幅広く一般の方々や子ども向けにプレゼンをするのはほぼ初めての経験でした。自分なりにコンテンツも工夫して、面白く作り上げたつもりでも、実際には分かりづらい、少し難しいということも多々あり、その度にセンターの方々にアドバイスを頂きながら修正していました。相手起点で物事を考えるのはコミュニケーションにおいての基本かもしれませんが、意外にもそれが難しいことで、強く意識しなければできないのだということについて、身を持って経験できたことは大きな学びでした。

④多文化の中で生きるということについて、私はオーストラリア多文化共生社会のからくりを探るということも、インターンシップの目標に掲げていました。オーストラリアに滞在する人々に話を聞いてみたり、短い間でも実際に自分もそこで生活してみて感じたのは、「多文化共生のために何をすべきか」というような思想はそもそもあまり無く、「違って当たり前」というような認識が根付いているのではないかとことです。街を歩けば誰がオーストラリア人かは全く分かりませんし、様々な言語が飛び交っています。だからといって人種や出身地でコミュニティが分かれているのかというところ恐らくそうでもなく、あらゆる人々が集まって交流している様子が見受けられました。

これは、そもそもオーストラリアが移民国家であるからということも大きく関係しているとは思いますが、この背後にどのような力学が働いているのかということまでは、正直なところ今回の滞在では分かりませんでした。とはいえ、日本が移民を受け入れる方向に舵を切りつつある今、オーストラリアから学ぶことは多いのではないかと思います。「違って当たり前」という考えは、ある程度の多様性が育まれれば、後天的に獲得していきけるのではないかと思います。多様性の中で疎外感や不満なくどう人々をまとめ上げていくのかということは自身の今後の研究課題にしたいと思います。

このような貴重な経験をさせていただいた西豪州兵庫文化交流センターの皆様、国際交流課の方々、GSP オフィスの方々、神戸大学基金の皆様を始めとして、全ての方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

